

# 夏の鈴鹿川体験報告書

実施日：2004 - 8 - 22

場所：鈴鹿川防災センター付近

体験記録：平田

天候にも恵まれた今年の「夏の鈴鹿川体験」は参加者も予定申込以上の参加で成功の裏に終了した模様である。

「亀山の自然環境を愛する会」も参画して浅田リーダーの下で鈴鹿川の魚を水槽で展示し参加者の採取した当日の魚&水中生物は別の水槽にて展示し多くの参加者の関心と興味を持たせ価値ある行事であったと思う。当日の子供たちの採取した生物や魚も多種多様であった。下記の魚と生物が確認され私自身も生きた魚を始めて観察することが出来た魚もあり大変有効な一日であった。

オイカワ	カワムツ	タモロコ	ウナギの稚魚	カマツカ
ギギ	シマドジョウ	カダヤシ	ブルーギル	ウキゴリ
マハゼ	ヌマチチブ	ヨシノボリ	ヤゴ類	タイコウチ
スジエビ	ヌマエビ	モクズガニ	ザリガニ	21 タニシ&他
22.モツゴ	23.ミズカマキリ	24.ゲンゴロウ		

「亀山の自然環境を愛する会」のブースには日ごろ交流会で接する多くの人達の協力があり子供達にも大変な好評であった。



スタッフの説明を熱心に聞き入る参加者



我々のブースにて



川遊びの参加者に説明をしている舟橋さん



子供達が採取した魚

# 第二回環境セミナー スウェーデンの環境政策に学ぶゴミ問題

出席者：浅田，西田，(記)平田

第二回の環境セミナー（三重県地方自治研究センター主催）は「スウェーデンの環境政策に学ぶゴミ問題」をテーマに三重大学の児玉教授の講演の後、質疑応答後グループワーキングを行い「家庭ゴミの有料化について反対・賛成」意見を述べ合いましたが、ゴミ問題は簡単に現状制度のままでは結論付けられないのを痛感した一日でした。以下講演内容と感想を報告致します。

## 【1】講演内容

- (1) 経済の社会を大きく二分すると「宇宙飛行士経済」と「カーボーイ経済」に分類できる  
「宇宙飛行士経済」・・・有限の中で有効にエネルギーを使う経済」リサイクル、リユース等  
「カーボーイ経済」・・・無限のエネルギーを信じ開拓していくアメリカ思想。資本主義社会等  
このような社会の中で「ガイアの発想」が1979年頃芽生える。ギリシャ神話のガイアは大地の女神のことで地球は女神であるという発想。つまり地球と共存していく発想をいう。
- (2) スウェーデンの「コモンアクセス」制度  
自然を単に経済的資産としてみなすのではなく、出来る限り保護されるべきと考える。人間は自然の恵みを土地の所有者だけでなく多くの人を受け取るべきであるというのがこの制度の発想である。そのための条件としては、その所有地の環境にダメージを与えない。動物を不安にさせない。所有者の経済的財産を尊重し、プライバシーを侵さないなどがある。この条件を満たせば誰もが私有地の自然を満喫することができるシステムになっている。  
自然は全ての者の財産であり、それを守っていくのは全ての者の義務としての感覚が養われた。

## (3) ゴミ問題

スウェーデンとドイツはゴミ問題政策の先進国である。ゴミの個人の排出量は日本と比べてもドイツは1/3で済んでいる。具体的政策としては「デポジット制度」の徹底があげられる。つまり料金にある一定の預かり金（デポジット）が上乘せされ、ビンや缶が返却された時預かり金が返却される制度。日本はこの制度が定着されず業界の団体が売り上げダウン等で反対している。日本も企業論理から環境論理へ発想の転換をせねばならないだろう。次に「生産者責任」として製造元、販売元は廃棄物の回収，リサイクルが義務付けされており、企業は製造段階より回収しやすく、リユース・リサイクルしやすいように設計され販売店は出来るだけ包装も簡単にするようになった。この点が日本はまだ出発段階で遅れている。  
日本は、公・共・私の中で公（街造りを主に行う国、市町村）と私（苦情・陳情・批判）に2極化した（これは戦後の民主主義から始まる）ため、共である（自分たちで考え自分たちで実行していく分野が遅れた。また日本は以前よりリユース（洗ってでも使う）して使うことが少なくアメリカの消費型文化の継承者であるのに対しスウェーデンやドイツはリユースして使うアンティーク（古いものを大事に使う）文化を持っている。

## 【2】グループワーキングをして感じたこと

ゴミを無料にするか、有料にするかの議論はあくまで手段であって今の日本は各自がゴミの量を削減する努力をすることと、企業・行政・消費者が一体となってゴミ削減の環境整備が必要であることが大事であることが痛感されたセミナーであった。

以上

# 調査船「あさま」に乗船して

「さかなの目」リーダー養成講座出席

日時：2004 - 8 - 21

観測場所：白子港より約5 km沖伊勢湾

調査船「あさま」に乗船して白子港より5 km沖の伊勢湾にて「酸素濃度測定」「ヘドロ採取」「透明度測定」「プランクトン採取」「海水温度測定」「塩分測定」等の調査を船員の皆さんの実態の見学、水産室の津本氏の説明、並びに観測機器類の見学を行った。調査地点での水底は約20 mであった。塩分、海水温度、酸素量の測定には「C・T・D」という機器が使用された。ヘドロ採取、透明度、プランクトン等は各々の専用機器、での調査であった。結果は下記の通りであった。

C(塩分)	温度	酸素量	透明度	プランクトン
33.4	24度	2.0 (ml/l) (ヘドロ採取)	3 M	肉眼では確認出来ず(15m海底にて)

ヘドロは硫化水素が含まれているようで卵の腐ったような匂いであった。

調査船「あさま」は伊勢湾から熊野灘まで15 定点箇所を定期的に測定しているとの説明あり。

説明では今年の伊勢湾は例年よりも台風等の影響もありヘドロも拡散され青潮現象は少ないようだ。

「あさま」には最新鋭の観測機器が搭載されておりコンピューターでデータ化されていた。

総トン数79トン、全長31 m、速力20ノットで機器類を含め約5億円の投資がされた調査船です。



乗組員による「C・D・T」機器  
乗組員に2名の女性が乗船活動中



ヘドロを採取一見粘土見えたが、嗅いでみると卵の腐った感じだった



ヘドロを採取した機器からヘドロを  
取り出す場面



波が後半若干高かったので見学者は  
下船時酔い気味でお疲れであった。

現場・現物で見学させてもらい陸からの汚れた物質を削減していかなばと痛感した一日だった。